

肥料の地域性と 季節性

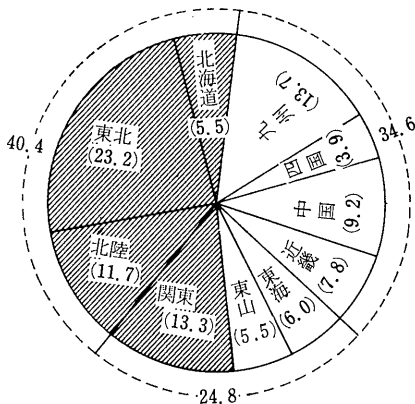
農林省肥料機械課

遠藤正夫

1. 肥料消費の地域性

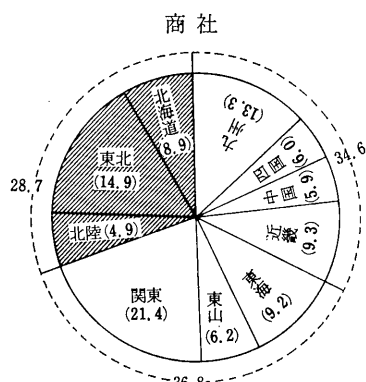
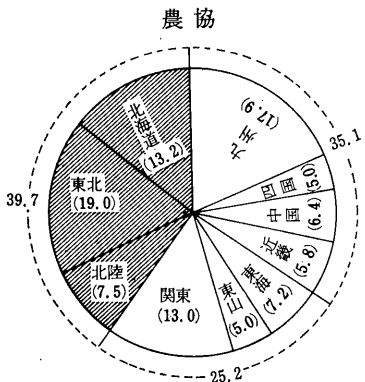
北から南へ3,000キロ。美しいわが国の風土に、肥料消費の地域性とその特殊な傾向がある。戦前、北海道では肥料消費シェアは全国の2%にすぎなかったものが、今では9%に拡大、重要な農業地域に成長した。東北地方では戦前の13%が、いま18%へとかなりのシェア増大である。北海道東北、北陸の東北日本では戦前約2割の肥料シェアだったが、いま3割を超える肥料市場である。

稲作肥料消費の地域別構成 (44肥料年度)

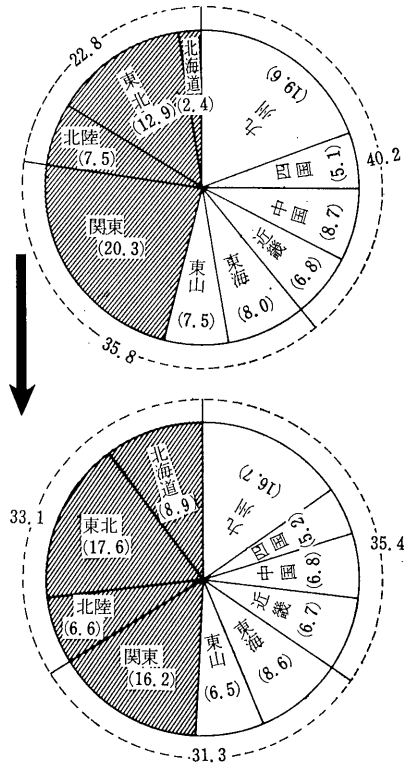


注 1) 戦前は昭和13年消費実績 2) 44肥料年度は各県作物別需要見込み
3) いずれもN肥料のみ。

高度化成の地域別出荷構成 (昭和43肥料年度府県別出荷実績より、数字は全国を100とした地域別シェア%)



肥料消費の地域構成



戦前 (昭和13年)

現在 (昭和44肥料年度)

近畿以西の西南日本では戦前4割のシェアが、いま35%に低下、関東、東山、東海の間地域では36%から31%に比重低下を示した。特に関東、九州の相対的比重低下は南関東、北九州の都市化、工業化によるところが大きい。

細長いこの島国を三分して考えれば、明らかに東北日本におけるシェアの増加、肥料市場の東日本への傾斜という各地域ごとの特殊化、変化がみられるのである。

これを、さらに、米作肥料の消費シェアでみよう。北海道、東北、北陸3地域の米作シェアは4割で、明らかに穀倉地帯として重きをなしている。米作転換打撃の一番深刻な地域でもある。

これに対し関東、東山、東海の中央地区では米作比重は25%、都市化地域、園芸作地帯としての性格を示している。

さらに、もう一つ、代表肥

料としての高度化成の地域別シェアを照合してみよう。農協のシェアでは奇しくも米作肥料の地域シェアと一致している。

東北日本4割、西南日本35%、中間部で25%の占有率である。

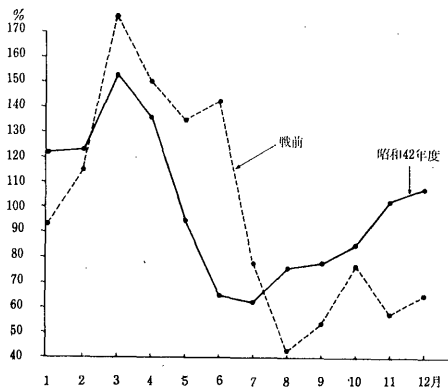
これに対し、商人系の扱いでは東北日本3割、西南日本35%、中間部37%であり、特に関東、東海などの都市化、園芸作地帯でのシェアが大きく、この分野における商人系の固定市場を示すものとみられる。農業地域における農協の優位性に対し、都市化地域における商人系の有利性が窺われる。

2. 肥料消費の季節性

国鉄輸送実績の月別波動をみると、月平均輸送量に対し、全貨物では上下7%程度のブレにすぎないが、肥料では最高5割、最低4割の振幅がある。肥料消費の地域性ととも、季節性という性格を無視できない。

戦前、この振幅は上8割、下6割の振幅で、最近よりも波動が大きかった。これは戦前では米麦偏重（米麦で7割の消費、いま5割を切っている。）の主穀式農業だったことと、ピークの3月を中心に、大豆油粕の輸入が活発化する特殊事情のためでもあった。

肥料消費の出荷波動（鉄道輸送）

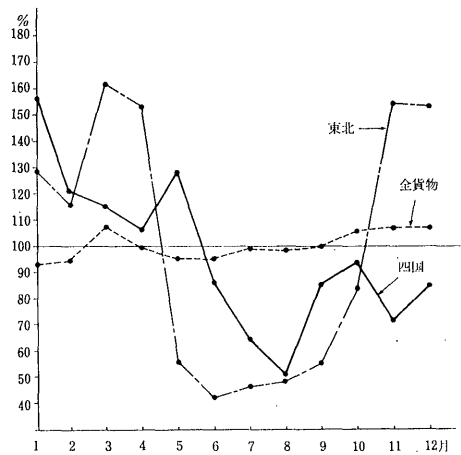


注 戦前は昭和6-8年3ヶ年平均、42年は国鉄輸送実績より、月平均量を100とした指数で示す。

この出荷波動を地域別にみると、東日本よりも西日本で波動が小さい。

単作地帯、積雪地帯ほど需要期が偏在して、このブレが大きいようである。一例を示すと、東北地方では月平均輸送量に対し、最高6割、最低

地域別肥料出荷波動



注 国鉄輸送実績より、月平均を100とした指数

6割の幅だが、四国では最高3割、最低4割の幅に止まっている。

3. 空間と時間の調整

肥料の地域性と季節性という二つの性格は、いわば、肥料流通の特性であり、肥料流通の合理化とは、供給者から消費者までの、または工場から圃場までの空間的、時間的調整を、如何に上手に行なうかということになる。

東北日本では季節性が特に強いだけに、この輸送、保管が問題であり、単作地帯では早取り保管などの特別措置が行われている。

特に、この保管措置がメーカー、卸、小売農家のどの段階で行なわれるか。

また、物の流れが、どういう径路で行なわれるかが問題である。

肥料の物流体系と流通の機能的体系が、どうスムーズに行なわれるかが、流通合理化のポイントであることはいうまでもない。

通運料金、倉庫料金などの流通経費が値上りしている今日、肥料の時間的、空間的調整を最も効果的に行うこと。

肥料の地域性、季節性という特性をどう調整し、克服するかということが、これからの課題となろう。